



刊行記念
特別定価 1,100円
(1983年1月末日まで)
0398-368040-7600

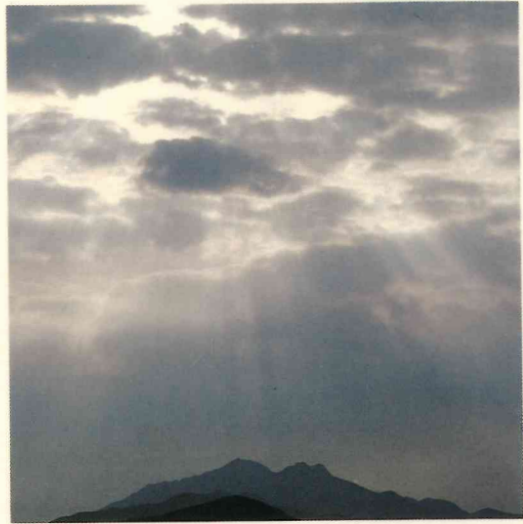
天遊の詩人 李白

中国の名詩 4

平凡社

天遊の詩人

中国の名詩 4



田中克己訳

李白

「花間 一壺の酒
ひとり酌んであい親しむものなし」
みずから酒中の仙と称した李白
酒を愛し、女を愛し
神仙にあこがれた。また一方
家族を思い、友を偲び
この世の悲哀を味わった
そのすべてをかれは詩にうたった

知らず 明鏡のうち
いずこよりか秋霜を得たる



国宝 海獣葡萄鏡 (香取神宮所蔵)

目次

酒の詩^{うた}

- 月下の独り酒 その一(月下獨酌 其二) 2
その二(其二) 5
その三(其三) 8
野草の肴 (尋魯城北范居士失道落蒼耳中見范置酒摘蒼耳作) 11
終南山を下って (下終南山過斛斯山人宿置酒) 16
酒に対して(對酒) 19
旅中の作(客中作) 22
盃をとって月に問う(把酒問月) 24
酒をすすめる歌(將進酒) 27

- 山中での作（山中與幽人對酌） 32
 ゆくての困難 その一（行路難 其二） 34
 冬の夜の酔（冬夜醉宿龍門覺起言志） 37
 早春（早春寄王漢陽） 42
 賀知章の追憶（對酒憶賀監） 44

神仙の詩うた

- 玉真仙人の詞（玉真仙人詞） 48
 古風 その五（古風 其五） 50
 その七（其七） 54
 その九（其九） 58
 その十九（其十九） 61
 その三十（其三十） 64
 安陸の桃花巖で（安陸白兆山桃花巖寄劉侍御綰） 67

家族の詩うた

- 西岳の雲台の歌（西嶽雲臺歌、送丹邱子） 72
 元丹邱の歌（元丹邱歌） 77
 元丹邱と別れる（潁陽別元丹邱之淮陽） 80
 南陵の別れ（南陵別兒童入京） 86
 東魯の二人の幼な子に（寄東魯二稚子） 89
 稚子伯禽を問う（送蕭三十一之魯中兼問稚子伯禽） 94
 妻に代って（自代内贈） 97
 妻に送る その一（送内尋廬山女道士李騰空 其一） 102
 その二（其二） 104
 尋陽の獄から妻に（在尋陽非所寄内） 106
 烏江にて義弟宗璟に（竄夜郎於烏江留別宗十六璟） 109
 夜郎に流され妻に（南流夜郎寄内） 114

友情の詩うた

- 鳴皋の歌（鳴皋歌、送岑徵君） 118
孟浩然に贈る（贈孟浩然） 128
黄鶴樓にて孟浩然を送る（黄鶴樓送孟浩然之廣陵） 130
杜甫に寄せる（沙邱城下寄杜甫） 132
杜甫を送る（魯郡東石門送杜二甫） 135
王昌齡の左遷（聞王昌齡左遷龍標遙有此寄） 138
賈至と瀘湖を望む（與賈至舍人於龍興寺傍剪落梧桐枝望瀘湖） 140
洞庭に遊ぶ その一（陪族叔刑部侍郎曄及中書賈舍人至遊洞庭 其一） 142
その二（其二） 144
その三（其三） 145
その四（其四） 146
その五（其五） 147

相思の詩うた

- 阿部仲麻呂を哭する（哭晁卿衡） 148
月夜の江行、崔宗之に（月夜江行寄崔員外宗之） 150
鳥夜啼（鳥夜啼） 154
王昭君 その一（王昭君 其一） 156
久別離（久別離） 159
長干行 その一（長干行 其一） 162
玉階怨（玉階怨） 168
宮中行樂の詞 その一（宮中行樂詞 其一） 170
春の思い（春思） 172
子夜吳歌 その一（子夜吳歌 其一） 174
その三（其三） 176
怨みごころ（怨情） 178

越女のうた その一(越女詞 其二) 180

その二(其二) 182

その三(其三) 183

戦いの詩^{うた}

古風 その六(古風 其六) 186

その三十四(其三十四) 189

関山の月(關山月) 194

戦場南(戰場南) 197

胡無人(胡無人) 201

隠棲の詩^{うた}

秋浦のうた その一(秋浦歌 其二) 206

その二(其二) 210

その四(其四) 212

その五(其五) 213

その十(其十) 214

その十三(其十三) 216

その十五(其十五) 217

旧遊を憶う(經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰) 218

李白略伝 245

装幀／山崎登

カバー写真／富山治夫

口絵写真・泰山／富山治夫

口絵写真・国宝 海獸葡萄鏡／香取神宮所蔵

酒
の
詩^{うた}

月下の独り酒

その一

花の中で一壺の酒をかかえ
ひとりで飲んでいて友もない。
杯をあげて明月をむかえ
自分の影とあわせるとやっと三人となった。
月ほしかし酒を飲むことなどわからず
影もわたしについて来るだけだ。
でもまあ月と影とをつれにして
たのしみを春にふさわしくやってみよう。
わたしが歌うたうと月はうるつきまわり

わたしが舞うと影はあちらこちらに動きまわる。
酒のさめている時はよろこびあうが
酔ってしまうとそれぞれちりぢりになる。
このように三つはこの世を離れた友情をもち
約束している場所をはるかな天の川だ。

月下獨酌

月下の独酌

其 一

その一

花間一壺酒
獨酌無相親
舉杯邀明月
對影成三人
月既不解飲

花間 一壺の酒
獨酌 あい親しむなし。
杯を挙げて明月を邀え
影に対して三人をなす。
月すでに飲を解せず

影徒隨我身
暫伴月將影
行樂須及春
我歌月徘徊
我舞影零亂
醒時同交歡
醉後各分散
永結無情遊
相期邈雲漢

影いたずらにわが身に隨う。
しばらく月と影とを伴つて
行樂すべからく春に及ぶべし。
われ歌えば月徘徊し
われ舞えば影零亂す。
醒時ともに交歡し
醉後おのおの分散す。
永く無情の遊を結び
あい期して雲漢邈かなり。

その二

天がもし酒を愛しないのなら
酒星が天にあるはずがない。
地がもし酒を愛しないのなら
地に酒泉郡がないはずだ。
天も地もすでに酒が好きだから
酒を愛しても天に恥じる必要はない。
まゝに清酒のことを「聖」といい
また濁酒のことを「賢」といったと聞いている。
賢も聖ももはや酒を飲んだのだ
どうして神仙を求める必要があろう。
三盃飲めば天地の大道に通じ
一斗飲めば天地の自然に合する。

ただ酒の趣味を得ても
酒を飲まないものによってやるな。

其二

その二

天若不愛酒 天もし酒を愛せずんば
酒星不在天 酒星は天に在らざらん。
地若不愛酒 地もし酒を愛せずんば
地應無酒泉 地にはまさに酒泉なかるべし。
天地既愛酒 天地すでに酒を愛す
愛酒不媿天 酒を愛し天に媿じず。
已聞清比聖 すでに聞く「清は聖に比び」
復道濁如賢 また道う「濁は賢のごとし」と。
賢聖既已飲 賢聖もすでに飲む
何必求神仙 なんぞ必ずしも神仙を求めん。

三盃通大道 三盃 大道に通じ
一斗合自然 一斗 自然に合す。
但得酒中趣 ただ酒中の趣を得るも
勿爲醒者傳 醒者に伝うるをなすなかれ。

(一) 酒星 また酒旗ともいい、軒輊(しし座)の右角南の三星。(二) 酒泉郡 いま甘肅省酒泉
県を中心とした郡。(三) 「聖」といい……「賢」といった『魏略』に「太祖(曹操)酒を禁じ
しかも人びと窃かにこれを飲む。故に酒と言ひ難く、白酒を『賢者』となし、清酒を『聖人』と
なした」と見える。

李白略伝

田中克己

李白の祖先はかれ自身の言によれば、漢の武帝の時の勇将で、匈奴から飛將軍とあだ名された李広であり、そのまた十六世の孫でいまの甘肅省蘭州市に都して西涼の国を建てていた李嵩が李白の九世の祖だといふのである。

唐王朝の李氏もこの李嵩の子孫と称しているのであるから、これがまこととするなら、家柄も良いことになるが、李白の最後に遺稿を托したといふ李陽冰の「草堂集序」には「李白の家は……中ごろ罪に非ずして条支じょうしに流されて姓と名とを変え、五代の間は士族の身分をも離れて庶民となった。唐の神龍（中宗の年号）の初め、李白の父が蜀に逃れ帰ってまた李姓に戻り、そのうち李白を生んだのである」といい、同じく唐の范伝正の「唐左拾遺翰林学士李公新墓碑並序」によると「隋末の戦乱に当り、隴西の李氏の一支が碎葉さいえつに流され、困苦窮乏して姓を変じたため、その同族たる李氏が唐朝を創立しても、一族の籍には載せられなかった。神龍の初め、広漢（四川省）に帰り、客（父の名）が李白を生んでのち、復姓したのである」といふ。これは李白の嫡子伯禽の自筆の十数行の所記によつてゐるといふのである。条支は白鳥庫吉博士によるとティグリス・ユウフラテス河

の川中島のメソポタミアのメセネ、すなわち今のイラク国に充てられたが、唐人の条支はおそらくも少し近くのイランのことであろうと思われる。しかし、漢人がそこまで移民するとは考えられないから、范伝正によって碎葉、すなわちイシタクリ湖(唐代の熱海)から流れ出るチュー河(唐代の碎葉水)の岸なる碎葉城(今のソ連キルギス共和国のトクマク市)にいて、唐代になって東に移り、父の代に四川に転入したと考える方が合理的である。唐王朝からは一族と認められなかったのに、李白は盛んに一族だといひ、皇族徐王李延年・延陵を従兄弟と呼び、また道王の曾孫李叔雲を叔と呼び、後事を托した李陽冰をも一族として従叔と呼んでいる。郭沫若『李白与杜甫』(一九七一年、北京、人民文学出版社刊)も世代(輩行)が矛盾していると指摘しながら、李白は血統的には碎葉出身の純粹な漢人だとしている。

母がみごもった時、太白星(金星)が懐に入ったとゆめ見たので、太白という字がついたというのも、このロマンチックな詩人にふさわしい逸話であるが、四川に父が住みついたのはその五歳の時というから、塞外で生まれたと考えて宜しかろう。四川へ父が来たのは商業のためらしく、また数十万の遺産をも残し、幼少の時には干支の暗記からはじめて百家の書を読ましたというから、儒教を主とする家柄でなかったことが明らかである。父がみずから教えたのは同じく四川出身の司馬相如の「子虚の賦」だったと李白みずから述べている(秋、敬亭にて従姪弟の廬山に遊ぶを送るの序)。「十五の歳また剣術を好み三十にして文章を成し、卿相に歴り抵る(韓荊州に与える書)」ともいっている。郭沫若はこの文章の後半から、三十歳のころ長安に上ったといっているが、前礼

部尚書で益州(四川省北部)長史に左遷された蘇頔などに認められたことをいっているので、長安でのことではあるまい。

玄宗の開元一三年(七二五年)、四川から出て来て各地をめぐるたあと、湖北省の安陸のものとの宰相許圜師の孫女の婿となり、十年ほどこの方面にとどまった。一男一女が生まれ、男子を明月奴といった。

開元二三年(七三五年)、安陸を去り、北に向かって太原(山西省太原市)に行ったあとと山東省の濟寧市に住まい、結婚して頗黎・平陽の一男一女が生れた。頗黎が弟で、のち伯禽と名のつた。このころ徂徠山(泰安県)の竹溪で孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔と六人で酒のみ歌っていたので、竹溪の六逸と称せられた。

天宝元年(七四二年)、浙江省の剡溪(嵊県)にいたが、道友元丹邱のあとを追って、賀知章・呉筠・玉真公主ら道教関係の推薦で宮廷に召され、泰山に登ってから長安に赴いた。この年、道教の師である胡紫陽が死んだ。長安では翰林院供奉として酒宴の際に歌を作らされ「清平調詞」(三首)、「宮中行樂詞」(十首)などが成った。

天宝三載(七四四年)賀知章が辞職帰郷したので、玄宗の命によって送別の詩を作った。この年、みずからも辞職して、山東省に高道士をたずね、道録(道士の称号)を授かったあと各地を旅行したが、開封にとどまることが長かった。杜甫・高適・岑参などの詩人との交友もこの期間のことである。

天寶一三載（七五四年）金陵（いま江蘇省南京市）で魏萬（のち魏顥）と会い、別れて宣城（いま安徽省）にゆきここに留まった。

天寶一四載（七五五年）安祿山が乱を起し、東都洛陽を都として、翌年正月元旦、帝位につき、大燕皇帝と称した。これよりさき六月に長安が占領される直前、玄宗は四川省に逃れた。李白は宣城から廬山に赴いた。このとき四番目の妻宗氏もここに避難していた。一五載（七五六年）七月、皇太子が靈武（いま寧夏省）で即位し、年号を至徳とあらためた。弟永王璘は父玄宗の命で、江陵郡（いま湖北省）大都督となり、李白を招いて幕僚とし、「永王東巡歌」などを作らせた。

至徳二載（七五七年）二月、肅宗より叛軍と認められた永王の水軍は、官軍と戦って敗北、永王は戦死した。李白は逃れたが捕えられ、尋陽（いま江西省九江市）で獄につながれた。崔渙・宋若思らが赦免を乞うた。獄から出て宋若思の代筆で上奏文を作った。

乾元元年（七五八年）夜郎へ流罪ときまり、洞庭・三峡をへて巫山（いま四川省）に至った。この間、漢陽で張鎰と五月五日に詩の贈答をし、太守王葉の宴にも臨んだ。

乾元二年（七五九年）大赦にあい、巫山より長江を下り、江夏（いま武漢市）、岳陽をへて、また尋陽（九江市）に来た。

上元二年（七六一年）金陵（いま江蘇省南京市）に遊び、宣城・秋浦・南陵・当塗といまの安徽省の各地を往来した。

代宗宝応元年（七六二年）四月、玄宗・肅宗父子が相継いで崩じ、代宗が即位した。李白は当塗

県令李陽冰のもとにいて、十一月病死した。臨終に草稿一万巻を李陽冰にわたし刊行をたのんだ。龍山の東麓に葬られたが、唐の憲宗の元和二年（八一七年）青山の南に改葬された。

范伝正の「墓碑銘序文」によると、当塗地方の觀察使に任じられて赴任すると、ただちにその墓を訪れ、墓辺の樹木の樵採を禁じ、墓碑を清掃する一方、李白の子孫をさがすと、三、四年たつてやっと孫女二人のいることが判明した。一人は陳雲という者の妻、一人は劉歆の妻であるが、ともに夫はただの農民で、役所に召して会ったら衣服も飾らず、かたちも素朴であった。ただ振舞いのみは閑雅で、応対もはきはきしていた。聞けば、父の伯禽は、李白の死後三十年の貞元八年（七九二年）に官吏にもならないで死んだ。兄が一人いたが、旅に出てから十二年、今は行方不明である。父兄ともいなくて困窮し、やむを得ず農夫にとついだ。そんなことで役所の調査にも父祖の恥になると思つて隠していたが、このごろ皆から強いられるので、恥を忍んで参つた、といい、いい終つて泣くのを見て、范伝正も涙が出た。聞けば、李白は尊敬する齊の謝朓にゆかりのある青山に葬つてほしいといったが、それもかなわず龍山の東麓に葬った。墳の高さ三尺、次第に盛土が崩れて来る、という。范伝正はこれをあわれんで、下僚の当塗の県令で、これも詩の好きな諸葛縦に命じて、新しい墓を青山の南に造つた。これが元和十二年（八一七年）の正月二三日のことで、旧墳の西六華里だったという。范伝正はまたこの二人の孫女を士族に改嫁させようとしたが、夫婦の道は天命であり天分だといって肯んじない。で、ただその税と徭役とを免じるのとどめたという。

これよりまた二十数年後の会昌三年（八四三年）に范伝正と同じことをしたのが裴敬である。か

れもこの二孫女に会っているが、「すでに墓を拝しないこと五、六年」といっており、税や賦役もまた復せられていたとみえ、裴敬が時の当塗県令の李都傑にいつてこれを免除せしめている。この少し前、唐の文宗皇帝が唐の三つのすぐれたものとして、李白の詩歌と裴敬の曾叔祖なる裴旻の劍舞と張旭の草書とを挙げていたのである。このように李白の名はいよいよ高いのに墓詣りもしない孫女とは不肖の子孫といわざるを得ない。しかし詩酒の人李白にとっては、この方が似つかわしいといえよう(田中克己『李太白』昭和二十九年、元元社、民族教養新書を参照)。

中国の名詩 4 天遊の詩人・李白

発行日 一九八二年九月三〇日 初版第一刷

訳者 田中克己(たなか・かつみ)

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五番地

電話・東京〇三二六五―〇四五―(代表)

振替・東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社/株式会社東京印書館
製本 株式会社石津製本所

不良本は小社読者サービス係でお取替を致します(送料小社負担)

中国の名詩 全10巻

10	9	8	7	6	5	④	3	2	1	
花影のうた	黎明のうた	山林のうた	長江のうた	王都のうた	漂泊の詩人	天遊の詩人	憂愁のうた	滄浪のうた	うたの始め	
詞と賦	魯迅・毛沢東ほか	宋・清	唐詩II	唐詩I	杜甫	李白	漢・六朝	屈原	詩経	
伊藤正文	須田禎一	今村与志雄訳	前野直彬訳	前野直彬訳	佐藤保	小野忍	田中克己訳	一海知義訳	伊藤正文訳	目加田誠訳
	田森襄訳									目加田誠訳

白ぬき数字は既刊

定価各巻 1,400円

④のみ発刊記念特別定価 1,100円

(1983年1月末日まで)